

丘の上に大木があった。様々な色の花を咲かせる大木だった。

かつては大陸中で見られたが、もうその一本しかなかった。一本にまで数を減らしたのは虫食いと病気とも言われていたが、そこに住む人々はその一本さえあればよかったのであまり気にしなかった。誰も調べなかった。

その樹はその周辺に住む人々にとつて守り神のようなものだったが、普通の樹とほとんど何も変わらなかった。葉は火を着ければ燃え、枝は力を込めれば折れ、幹も斧で打てば傷ついた。はつきりと言ってしまうえば、見た目が派手で、長命なだけの、ただの樹だった。

しかし、現代から昔々のとある日。その樹は特別になってしまった。

いつであるかは問題ではなかった。異文化の研究を目的に白い髪の男がその土地を訪れたことが大きな問題だった。白い髪の男の国に根付く神話に、色とりどりの花を咲かす大樹が書き記されていた。その男は勇氣と学問を備えていたが、あまりにも浅慮だった。

男は国に戻った後、国王にその大樹の美しさを語った。その国において、国王に選ばれた者が教皇を兼任していた。宗教に対する熱心さはその代において様々だったが、八代目国王の熱心さに比肩するものはいないと評されている。

白い髪の兵士たちがかつての領地奪還の名目で大樹のある大陸に侵攻したのはそれから十年後のことだった。国王は一度の侵攻ですべてを奪うつもりでいたと研究されている。実際はそうならなかったわけだが。

大樹は船が接岸した場所から北に進み続けた大陸北方にあり、そこにたどり着くにはいくつもの国や民族の縄張りを破り続けねばならなかった。

第一侵攻と第三侵攻が最も大樹に近づいた侵攻と記録されている。しかしどちらでも人外じみた力を持つ民族団に阻まれ、退かされている。第一・第二・第三侵攻で多くの死人が出て、それ以降の侵攻の理由に「復讐」が組み込まれた。そのせいで侵攻回数は三桁近くに及んだ。

かつての大地の奪還というはりぼての大義をほとんどの人が忘れ、犠牲に報いるという私怨が侵攻の主な目的に成り果てる頃に、大樹は意志を持った。

大樹は語らなかった。ただ、自身の成長のために命を奪うようになった。自身を求めて死んだ人々の命に味を占め、求める者、望む者から奪うようになった。ただの大木だった樹は、そうして世界樹に成り果てた。

人々は今や世界樹に平伏して生きている。世界樹は奪える者たちから奪い、成長を今もまだ続けている。貪欲に、強欲に、まるで人のように、どこまでも得ようとしている。

そして、人々もまだ争い続けている。